

<特集>

学生対象アンケートの実施とその結果に見る佐賀大学の課題

川野良信

(佐賀大学高等教育開発センター)

1. はじめに

近年、大学を取り巻く状況は大きく変化し、教育・研究活動に加え、社会貢献・地域貢献でも大きな期待が高まっている。その為、多くの大学はその期待に応えるべく様々な取り組みを行い、そして、さらなる大学改革に資するために自らがそれを点検・評価している。佐賀大学では平成20年度に大学評価・学位授与機構による認証評価を受ける予定であることから、より一層の力を自己点検・評価に注ぐべき時期に至っている。特に教育面では評価項目数が多く、かつ全教員が必ず携わっている領域でもあるため、自己点検・評価への十分な対応が望まれている。本学では平成18年度から「学生による授業評価アンケート」結果を自己点検・評価に結びつける取り組みを始めているが、それと平行して、大学の教育目標、教育体制、成績基準、施設・設備の状況等についても学生からの意見を集約し、教育環境全体の自己点検・評価を行う必要性が指摘されてきた。その指摘を受けて平成18年7月に学部3年生、大学院修士課程(博士前期課程)2年生、博士(博士後期課程)2年生を対象に学生対象アンケートを実施した。その結果については既に国立大学法人佐賀大学大学教育委員会・高等教育開発センター(2006)により報告されている。本論ではアンケート実施の概要とその結果から推察される佐賀大学の現況および今後取り組んでいかねばならない課題について述べる。

2. 学生対象アンケートの概要

アンケートは平成18年7月中～下旬にかけて行われた。本来はもっと早い時期の実施が計画されていたが、アンケート項目の選定に時間を要したため、結果として前学期末にまでずれ込むことになった。先に述べたように対象としたのは学部3年生(平成16年度入学学生)、大学院修士課程(博士前期課程)2年生(平成17年度入学学生)、博士後期課程2年生(平成17年度入学学生)であった。アンケートは対象学生・院生が受講する必修科目の講

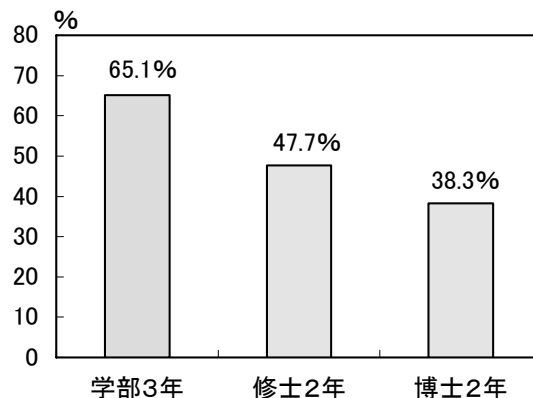


図1 アンケートの回収率

義において配付・回収を行った。また、実施に当たっては可能な限り対象学生の重複回答が無いように留意した。図1に回収率を示す。全学的な学部3年生の回収率は65.1%、修士課程2年生では47.7%、博士後期課程2年生では38.3%と学部学生から大学院院生にかけて低くなる傾向が認められる。これはアンケートの実施期間が短く、特定の授業を持たない大学院生(2年次)では配布・回収が十分に行えなかったことに起因している。学生対象アンケートは19項目からなり、そのうち第1、2、3、4、5、11、12項目ではいくつかの細項目が設定されている。なお、院生を対象としたアンケートはこの19項目から該当する項目のみを抜き出して行った。各設問の回答は1から5の5段階評価で行われ、その設問に答えられない場合は「分からない・該当しない」を回答することができるようになっている。なお、5段階評価の1-5の数値間は等間隔ではないが、便宜上3を中立的回答とし、5もしくは4の回答は評価が高い群、2もしくは1は評価が低い群として処理を行っている。項目は多岐・多数にわたっており、以下の記述では自己点検・評価の観点から、早急に取り組みねばならないと考えられる項目についてのみ述べることにする。

### 3. アンケート結果

本学の目的や学部の教育目標、成績評価基準、各種制度、施設利用案内についての調査結果を図2に示す。図にはそれぞれの項目毎に得られた5段階評価の全学的な平均のみを示している。図を見ると、本学の目的、所属先(学部や研究科)の教育目標、施設・設備の利用手引きについては学部3年生よりも修士2年生が、さらに博士3年生が高い周知度を示していることが明かである。すなわち、在籍年数が多ければ自ずと知り得ることを意味している。ただし、注目しなくてはならないのは本学の目的や学部の教育目標が学部生に周知されていない点である。本来であれば、それらは学生に限らず教職員にも周知されていなければならないものであるが、3年間在籍した学生の周知度が極めて低いことは憂慮すべき事であろう。

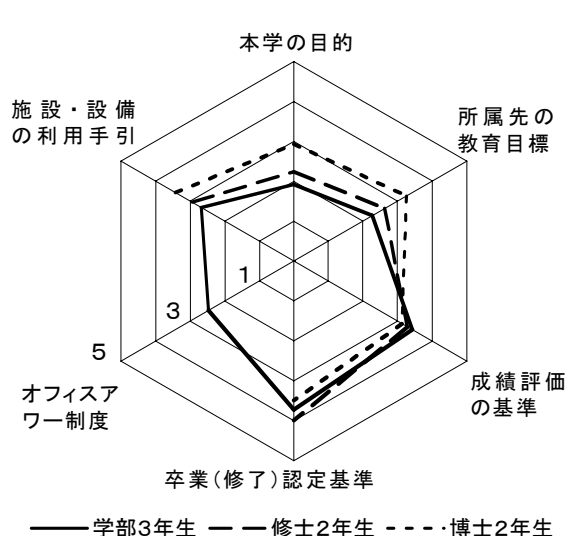


図2 大学の目的・制度等の周知度

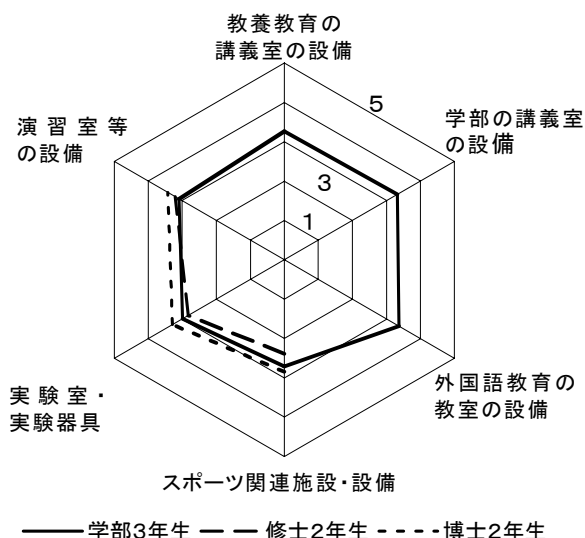


図3 施設に関する満足度

成績評価基準については学部3年生が最も周知度が高く、次いで修士2年生が続き、博士2年生が最も低い。この点はシラバスの整備状況とも関連しているので、一概には言い切れないが、学生・院生側の関心が徐々に薄れてきた結果を表しているのかもしれない。

一方、卒業・修了基準に関しては学生・院生共に高い周知度を示しており、成績評価基準と共に直接的に自らの利益に関わる項目についての関心は非常に高いことがわかる。

オフィスアワーについては制度そのものを知らない学生も多く、また、実際に利用している学生が極めて少ない実態が明らかとなった。さらに、院生にのみ設定した項目の解析から現在この制度がない修士課程・博士課程でもオフィスアワー制度を希望する声が多いことが明らかとなっている。

施設・設備についての学生・院生の満足度を図3に示す。教養教育の講義室や外国語教育の設備に関しては学部学生にのみ尋ねている。これらの施設に対する満足度は3.26～3.36であり、中間的な値をやや上回っている。図には示されていないが、学部の講義室の設備に関しては、学部学生が3.31、修士2年生が3.61、博士2年生が3.83と徐々に高くなる傾向を示している。ここ数年各講義室に液晶プロジェクターなどの設備を整える場合が増えたので、在籍年数が多い院生ほど満足度が向上しているのかもしれない。逆にスポーツ関連施設に関しては学部学生から院生まで全体的に満足度が低く、3を下回る結果が得られている。実験室や演習室の設備に関しては博士2年が最も高い満足度を示す傾向がある。

情報機器や自習スペースに関する満足度の結果を図4に示した。パソコン等の情報機器の整備については学部・研究科毎に格差が生じており学生・院生の満足度が低い項目のひとつと言えよう。特に学部3年生では、すべての施設における情報機器に関して3を下回る結果を示している。一方、自習スペースについても学部3年生の満足度は低く、3を下回っている。対照的に修士2年生・博士2年生はすべての項目について3前後の回答が多く、学部3年生との格差は明かである。これは院生が研究室に配属され、専用の机やパソコンが与えられる場合が多いことを反映しているのかもしれない。

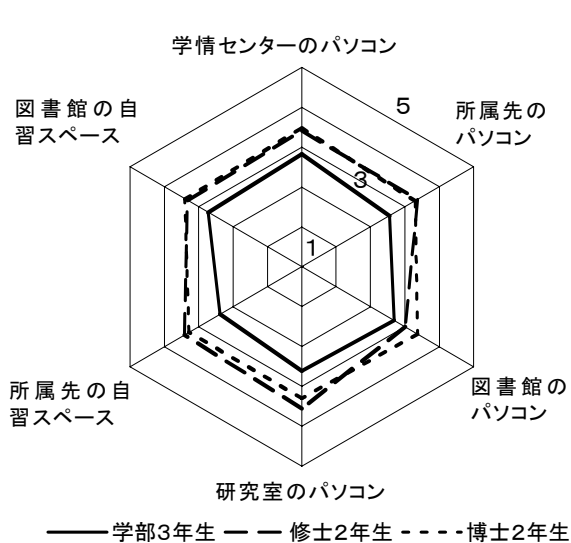


図4 パソコン・自習スペースに関する満足度

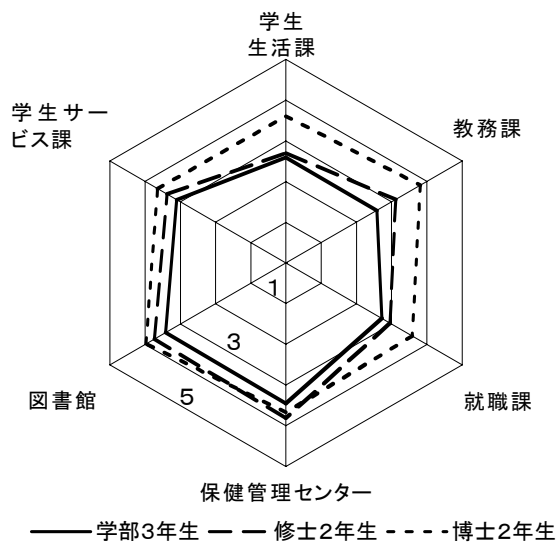


図5 事務職員の対応に関する満足度

図5に事務職員の対応に対する満足度の結果を示した。各事務組織の内、学生サービス課は医学部にある組織で、本庄地区の学生・院生には馴染みは少ない。ここで示されている結果には医学部・医学系研究科の回答が強く反映されていることを考慮しておかねばならない。図に示されているように、保健管理センターや図書館の事務職員に比べて学生生活課・教務課・就職課の事務職員の対応への満足度は低いようである。特にこの傾向は学部3年生に強く現れており、博士2年生は事務職員の対応についてすべて3以上の回答を寄せている。この結果は、学部学生に比べ院生は総数が少ないので、対応が十分に行き届いていることを示しているのかもしれない。

授業に対する満足度の結果を図6に示す。この図で外国語とは英語と英語以外の外国語の平均値、主題科目とは第1分野から第6分野までの平均値としてそれぞれ示している。なお、修士2年生や博士2年生は教養教育科目を受講していないため、専門科目のみの回答となっている。学部3年生について見ると健康・スポーツ科目が3を大きく上回るものの、他の科目に関しては3をやや上回る程度で推移している。専門科目についてみると学部3年生より、修士2年生、博士2年生と徐々に満足度が高くなる傾向がある。

各授業内容がシラバスに記載されている学習目標に即していたかどうかの回答結果を図7に示す。この項目でも、修士2年生や博士2年生は専門科目のみの回答である。この図の特徴は学部学生と院生との差がほとんど認められない点であろう。また、すべての授業科目において3を上回っていることも注目される。この事から本学の学生・院生は授業科目が概ねシラバスの学修目標に即していると考えていることがわかった。しかしながら、ここには示していないが、シラバスそのものを利用している学生は全体の25%に止まっており、もっと利用率が上がればこの結果も大きく変化するかもしれない。

#### 4. 質問項目相互の関連性について

国立大学法人佐賀大学大学教育委員会・高等教育開発センター(2006)の報告では各質問項目について学部毎の特徴を述べているが、質問項目相互の関連性については解析していない。ここでは前述の各項目について、何らかの関連性があるかどうかを検討することにする。

先に述べたように周知度の中で授業科目の成績評価基準に関しては学生の関心度が高い。学生にとって単位取得は重要なことであり、高い周知度を示す学生は授業科目に対する満足度も高くなることが期待される。そこで、成績評価基準の周知度と最も満足度が高かった健康・スポーツ科目との相関について検討してみた。図8は1～5の周知度毎に何人の学生が健康・スポーツ科目の1～5の満足度を回答したのかを表したものである。評価基準の周知度を1もしくは2と回答した学生は、満足度1～5のいずれも回答者数が低い傾向が認められる。3もしくは4の周知度をもつ学生は高い満足度を回答している。5の周知度をもつ学生はそれらの中間的な値を示している。紙面の都合で、他の授業科目については言及しないが、健康・スポーツ科目と同様の傾向がみられる。重要な点は授業科目の評価基準をよく知らない学生は満足度も高くないということである。

次に授業科目と関連する施設の満足度の関係を検討する。図9に総合情報基盤センターのパソコン数と情報処理科目の満足度の関係について示す。図書館や各学部にもパソコンは設置されて

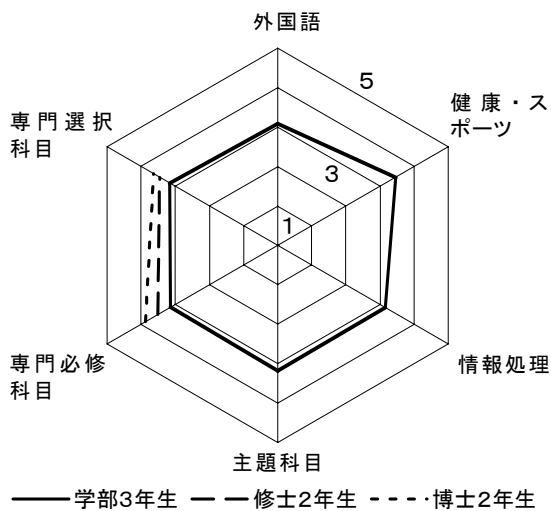


図6 授業科目の満足度

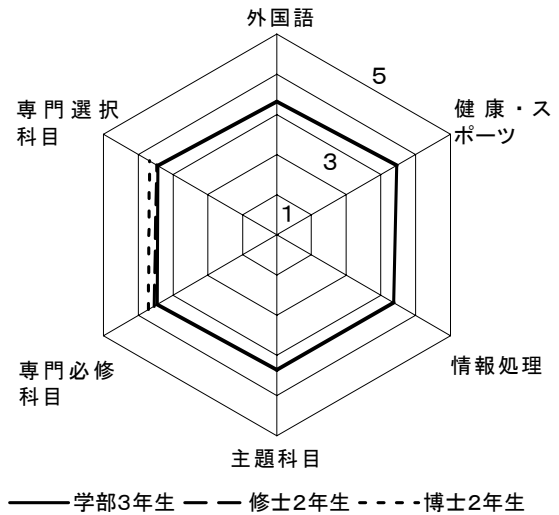


図7 学習目標に即しているか

いるが、授業に活用されているのは総合情報基盤センターのパソコンである場合が多いと考えてこの相関を調べてみた。この図ではセンターのパソコン数に満足度5を回答した学生の情報処理科目の満足度が低い傾向が認められる。しかし、授業科目の満足度に5と回答した学生はセンターのパソコン数にも高い満足度を示す学生である。情報処理科目の満足度で相対的に高い値を示して

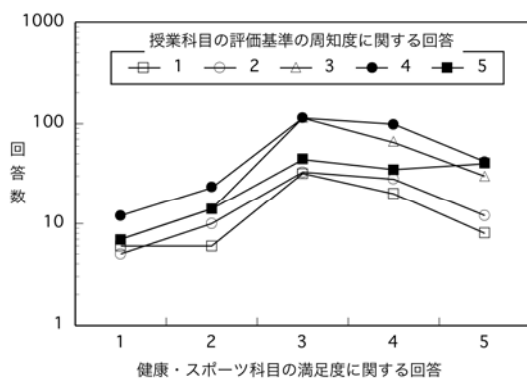


図8 授業科目の評価基準の周知度と科目の満足度との関係

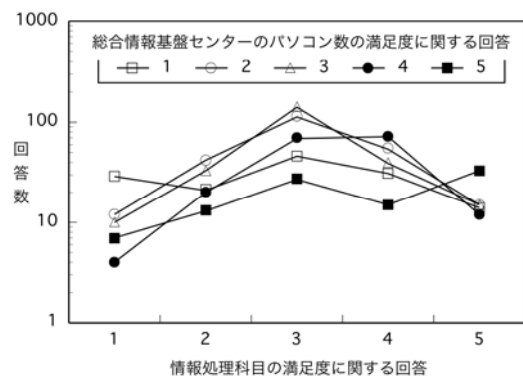


図9 施設・設備の満足度と科目の満足度との関係(1)

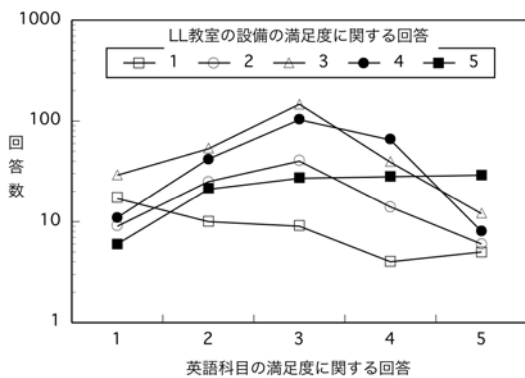
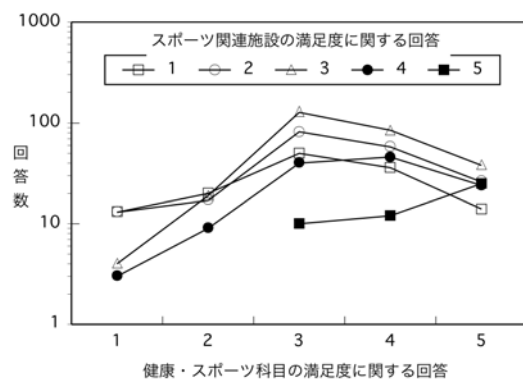


図10 施設・設備の満足度と科目の満足度との関係(2)



いる学生はセンターのパソコン数で2-3の満足度をもっている。通常、授業で使用される機器の満足度が低ければ連動してその科目の満足度も低くなると推測されるが今回の結果はそれと相反する。恐らく、講義で使用されるパソコン数は確保されており、学生が認識するパソコン数の不満とは常時自由に使用できるパソコンの数が少ないことなのであろう。図書館や学部のパソコン数の満足度も同程度で推移することから、単にパソコンの数を整備すれば情報処理科目の満足度が上がることには繋がらないと考えられる。

図10にLL教室の設備と英語科目の満足度、スポーツ関連施設と健康・スポーツ科目の満足度の相関をそれぞれ示した。LL教室の設備に対して満足度の低い学生は英語科目に対する満足度も低く、授業科目満足度1から4にかけて回答者数が減少する傾向が明らか

である。一方、教室の設備に5の満足度を返した学生は授業科目の満足度1から5にかけて回答者数が増加する現象が認められる。すべての英語科目においてLL教室を利用しているとは限らないので、一概には言えないが授業に高い満足度5を示している学生は設備に対しても満足度が高いことは指摘できよう。

スポーツ関連施設に高い満足度を示す学生は健康・スポーツ科目に対する満足度が必ずしも高くない傾向が認められる。健康・スポーツ科目の内容は講義・演習と実習に分けられており、実習に関してはスポーツ関連施設の使用が想定されるが、講義・演習の場合施設の利用は少ないと考えられる。したがって、施設には不満を持ってはいるが、講義・演習に高い満足度をもっている学生が多いのかもしれない。

前述のように授業科目と施設・設備の満足度には部分的に相関が認められるが、ほとんどの場合関連が薄いようである。本来であれば授業科目がシラバスに掲げる学習目標に即して行われ、それが達成できていれば科目に対する満足度も高くなることが期待される。そこで、授業科目に対する満足度とそれが学習目標に即していたかどうかについて相関を調べてみた。結果を図11に示す。外国語科目の場合、授業科目に対する満足度は英語とその他の外国語にわけて尋ねていたが、学習目標については外国語と一括して尋ねている。そのため、両者とも学習目標に関する結果は同じ値を用いるが、満足度に関しては英語とそれ以外の外国語の2つの場合において表示することにした。

英語科目の場合、内容が学習目標に即していなかったと回答した学生の科目に対する満足度は1から5になるにつれて回答者数が減少する傾向が認められる。一方、即していたと回答した学生は科目に対する満足度が1から5になるにつれ徐々に増加する傾向が認められる。このことはシラバスに書かれている学習目標に即して行われた英語科目については高い満足度が得られ、即していなかった場合は低い満足度しか得られなかったことを示している。同様の結果は英語以外の外国語科目においても顕著に表れており、学習目標が即していなかったと回答した学生は、低い満足度を示す結果になっている。健康・スポーツ科目に関しては学習目標に即していたと回答した学生は高い満足度を示していることは明かであるが、即していなかったと回答した学生は相対的に低い満足度を示すものの値が分散して明瞭な傾向は認められない。英語科目に認められる変化傾向と同様の傾向は情報処理科目にも認められており、やはり学習目標に即していたと回答する学生の満足度は高くなる傾向にある。専門選択科目や専門必修科目に関しては健康・スポーツ科目と同様に、学習目標に即していたと回答した学生は高い満足度を示しており、即していなかったと

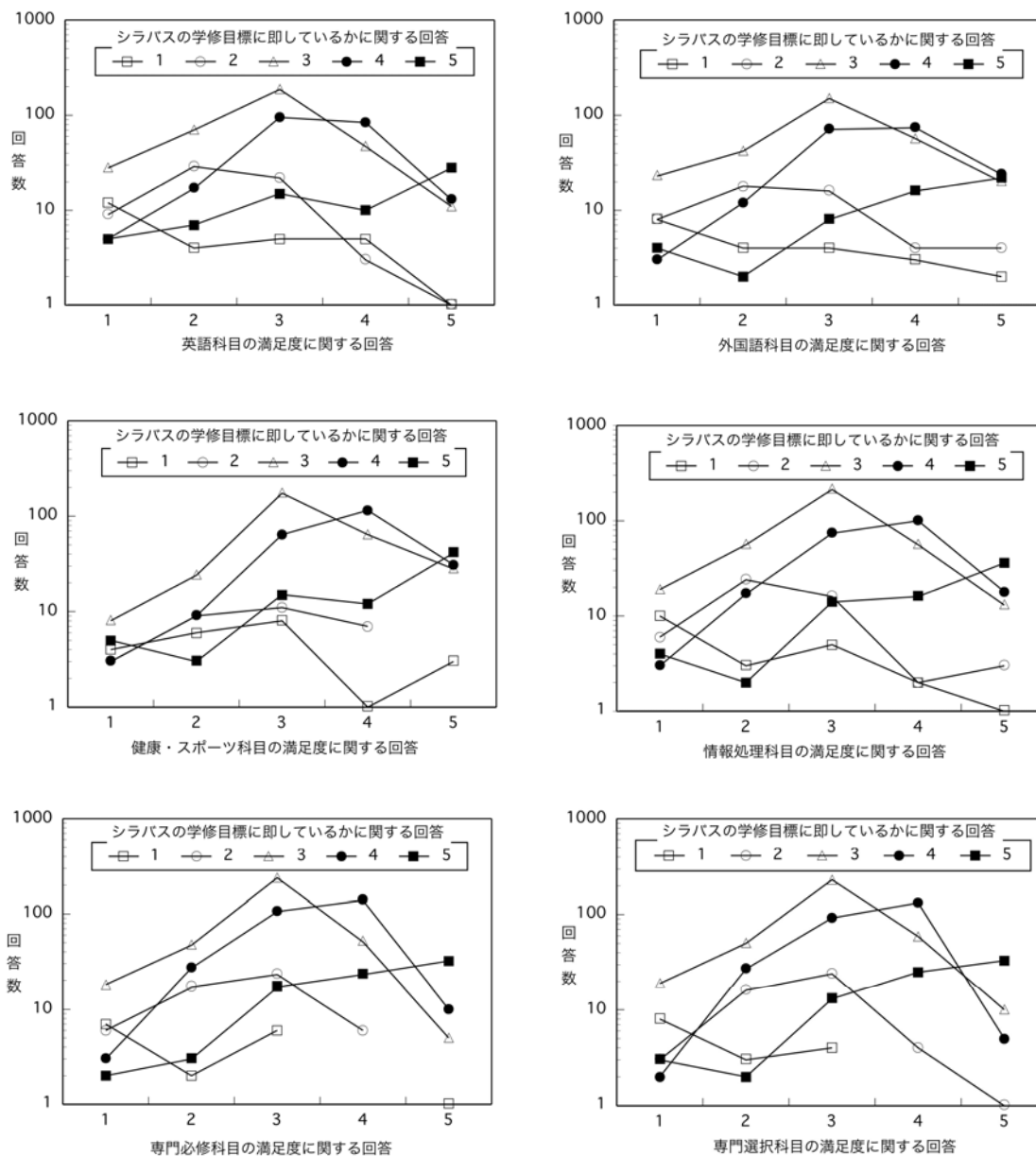


図 11 授業科目の満足度とシラバスの学習目標との相関

回答した学生は分散して明瞭な傾向を示していない。いずれにせよ、ここで明らかなことはシラバスに学習目標を明記し、それに即して授業を実施した場合、学生は高い満足度を示す場合が多いと言ふことであろう。逆に言えば、学生から高い満足度を得るためには、まずシラバスに学習目標を明瞭に示しておくことが重要ということである。

## 5. 今後の課題

本学の目標や学部の教育目標、成績評価基準、各制度、施設案内などは従来学生に周知させておかねばならない事柄である。アンケート結果では必ずしも満足な結果は得られていない。そもそ

も、学部・研究科、課程・学科・専攻等で教育目標が掲げられていない組織が未だにあり、その整備が緊急の課題であろう。さらに、入学時・進学時のオリエンテーションで繰り返し周知する等の取り組みが重要と考えられる。オフィスアワー制度については院生を対象にした場合も想定して抜本的な見直しを行う必要がある。

施設・設備についての学生の満足度は学部の特性によって異なっているが、スポーツ関連施設や実験室・実験器具の充実が急務であろう。実際に施設・設備と授業科目の相関は必ずしも明瞭ではないが、実態をきちんと把握した上で、実状に合った改善を行わなければならない。情報機器の整備については学部・大学院毎に満足度の格差が生じており学生の満足度が極めて低い項目のひとつと言えよう。将来的には学部に情報機器の整備・管理を司る組織を設ける必要があるかもしれない。

事務職員の対応については具体的な事例が分からないので明らかには出来ないが、保健管理センターや図書館の事務職員に比べて教務課・就職課など学生センターの事務職員の対応に対する満足度は低いようである。事務職員対象としたアンケートを実施して実状を把握してから改善に取り組む事が望まれる。

授業に対する満足度については一定の評価が得られているもののそれほど高くなく、カリキュラムの見直しや教育体制の改善などを視野に入れた抜本的な改革が必要である。無論、教員ひとりひとりの授業改善への取り組みも不可欠であることは間違いない。また、シラバスに記載した学習目標に即して講義を行うことが、学生の満足度に影響を及ぼしていることが伺い知れた。今後、教員はシラバスの充実を図ると共にしっかりとした授業設計を行うことが望まれる。

## 【引用文献】

国立大学法人佐賀大学大学教育委員会・高等教育開発センター(2006)、平成18年度佐賀大学  
学生対象アンケート報告書。